1.初めに

日本語は膠着語で語順が変わっても意味が通じるが、中国語は独立語で、語順が変わったら意味が分からなくなると言われている。しかし、いくら表現形式が違っていても、受身表現には類似するところがある。例えば中国語母語話者にとって「太郎は花子に殴られた」という文は「太郎被花子打了」と素直に理解できるが、「私は花子にパーティーに行かないと言われた」という文は「我被花子説不去聚會」になり、極めて不自然で理解しづらい。さらに、「パーティーに誘ってくれた」と「パーティーに誘われた」では、前者は、聞き手がパーティーに誘われたことに対してうれしい・感謝の気持ちを表す恩恵表現であるが、後者は、聞き手にとっては困る気持ちを表す受身表現だと考えられがちである。したがって、多くの学習者は受身文が被害・迷惑の表現に結びつきやすく、被害・迷惑以外ほとんど受身を使わない傾向がある。

受身文は現在に至るまで、構文をはじめ、幼児の受身文習得、外国人学習者の受身文習得など、様々な視点から研究されている。まず、構文の習得について、中国語に対応できる受身文は習得されやすいが、対応できない受身文は習得されにくいという（馮 1999 等）。次に談話の展開について、田中（1999）は英語、韓国語、中国語母語話者の日本語ヴォイスの習得順序について、まず可能形が習得され、次に受益、有情物直接受身文が習得されると述べている。さらに、視点に関しては、日本語は常に自分の立場或いは自分に近い立場から言葉を発すると言われている（森田 1995）。日本語の受身は視点を統一して物事を述べているが、中国語は客観志向から物事を述べていると言われている（渡邊 1999）ため、被動作主が自分自身或いは自分にかかわりのある人でなければ、あまり受身文を使わないと言われる。このように、日本語と中国語では受身文表現が異なり、習得されるまでは時間がかかると考えられる。

先行研究を概観したところ、どのような受身文が外国人学習者にとって難しいか、また習得順序もある程度わかってきた。しかし、中国語母語話者がどのように受身文を使い始め、どのように発達していくかに関する研究は少ない。中国語の“被”構文に対応できる受身文は学習者にとって習得されやすく、対応できない受身文は習得されにくいと言われているが、自然な発話での使用もそのような傾向があるかどうかに関

する研究も少ない。そこで、本研究では、中国語学習者を中心に、学習者がどのような受身文を使用しているかを観察し、受身文習得のプロセスを見ていきたい。

2.先行研究

受身文はこれまで構文をはじめ、幼児や外国人学習者の習得など様々な視点で研究されている。2.1 では日本語と中国語の構文、2.2 では受身文の主観性に関する先行研究、2.3 では日本語学習者に関する研究を概観する。

2.1 日本語の受身文と中国語の受身文

受身とは、動作による働きかけや作用を受ける人や物を主語として文を構成することである（日本語記述文法研究会，2009）。つまり、影響を被った人や物の立場から物事を述べていると考えられる。構文に関しては、中国語の受身文の使用は様々な制約があり、使用範囲も日本語の受身文ほど幅広くないと言われている（奥津 1983）。日本語の受身文は中国語でも受身文で表せる文もあれば、中国語では受身で表せない文もある。日本語の受身が中国語では表せない時には、能動文で表現される。また、論説文では、日本語では、動作主が明示されていない受身文が多用されるのに対して、中国語では、受身文より能動文が多用されている（中嶋 2007）。

2.1.1 受身文の分類

日本語の受身文は、学者により様々に分類されている。寺村（1982）では、受身文を「直接受け身」と「間接受け身」の 2 種類に分けた。益岡（1989）では、「受影受動文」と「属性叙述受動文」と「降格受動文」と分け、仁田（1991）では、「まともの受身（直接受身）」と「持ち主の受身」と「第三者の受身（間接受身）」と 3 種類に分けた。そのほかにもいくつかの分類があり、研究者によって分け方も名称も異なっている。しかし、大部分の研究者は、動作を直接的に受け手が被る受身文を直接受身としている。動作を間接的に受け手が被った受身文を間接受身としている。本研究では、寺村（1982）に従い、「直接受身」と「間接受身」に分ける。また、「間接受身」の下位分類に仁田（1991）に従い、「持ち主」を加えた。

一方、中国語の受身文の研究に関しては、大河内（1983）、劉ほか（1991）、杉村（1997）などが挙げられる。劉ほか（1991）では、中国語の受動文を意味上の受動文

と“被”構文の 2 種類に分けた。意味上の受動文とは、構文や語順は能動文と変わらないが、意味的には主語が動作の受け手になる。“被”構文とは、介詞“被”“叫”“讓”“給”などが用いられる文であると述べている。さらに、中国語では、受け身の意味を含んでいる物事を述べる際に、よく意味上の受動文が用いられていると述べている。

2.1.2意味的な特徴

日本語の受身文の特徴について、日本語記述文法研究会（2009）は下記のようにまとめている。

> 直接受身文は、対応する能動文のヲ格名詞やニ格名詞など、文が表す事態の成立に直接的に関わっている人や物を主語として表現する受身文である。（中略）間接受身文は、対応する能動文の表す事態には直接的に関わっていない人物を主語とし、話し手がその人物と事態を主観的に関係づけ、事態と間接的な関係を持ったものとして表現する受身文である。（中略）持ち主の受身文は、対応する能動文のヲ格名詞やニ格名詞などの表す人や物の持ち主を主語として表現する受身文である。
>
> （日本語記述文法研究会 2009,pp.215-216）

直接受身の意味的な特徴は(1)のように、事態の動きや状態を描写するものと(2)のように主語の性質を述べるものがある。

（1）田中が佐藤に嫌われている。

（2）美空ひばりの歌は、今でも歌い継がれている。

（日本語記述文法研究会 2009,p226）

間接受身は、迷惑の意味を表す特徴を持っている。（3）では、雪が降るという出来事を直接的に鈴木は被っていないが、鈴木は雪が降るという出来事から迷惑・不如意な影響を受けたことを表している。ただし、（4）のように、例外的に、迷惑の意味のない間接受身文もある。

(3) 鈴木は、入試当日に大雪に降られて、あやうく試験に遅れるところだった。
（←入試当日に大雪が降った。）

(4) 夏の夕暮れ、ベランダで（私が）風に吹かれながらビールを飲むのが、私は好きだ。（←風が吹く。）

（日本語記述文法研究会 2009,p241）

持ち主の受身は、直接受身のように、目の前の出来事を描写する時に使われている。直接受身と違っているところは、動作を被ったのは人の所持物や分離不可の体の一部分である。（5）は受け手の体の一部分が物理的な動作を被ったことを表す。

(5) あっ、弟が鈴木君に肩をたたかれた！（←鈴木君が弟の肩をたたいた。）

（日本語記述文法研究会 2009,p245）

したがって、日本語の受身では迷惑の意味を表すのは間接受身であり、直接受身と持ち主の受身は必ずしも迷惑の意味を表しているとは限らない。

一方、中国語の“被”構文の意味的な特徴について、不如意或いは望まない出来事を述べる際によく使われると言われている。しかし、中国語の“被”は迷惑・不如意の意味を表すだけではなく、迷惑・不如意を持たない“被”構文もあるとする研究者もいる。中野（2000）は、“被”構文は古来被害・迷惑・不如意として使われてきたが、近代化にともなると、大量の西洋語が取り入れられ、被害・迷惑を伴わない“被” 構文が作られたと述べている。

2.1.3 日本語の受身と中国語の受身との比較

日本語と中国語の受身の対照研究に関しては、飯嶋（2007）が論説文における日本語の受身と中国語の“被”構文の違いを研究した。その考察の結果によると、全体的に見て、日本語の「動作主不明」と「動作主あり」「内容の受身」は中国語の“被”構文に対応できる文が少ない。

直接受身で「動作主不明」の 481 例のうち、中国語の能動文に訳されたのは 263 例、約 54.7％占めており、“被”構文に訳されたのは 18 例、約 3.74％である。特に、このような受身文は中国語の“被”構文に訳される際に、原文にない動作主が補われる。「動作主あり」の 83 例のうち、中国語の能動文に訳されたのは 27 例、約 32.5％であった。“被”構文に訳されたのは 14 例、約 16.9％であった。一方、「内容の受身」は中国語の能動文と慣用表現に訳された。それぞれ、111 例のうち 39 例と 29 例ある。つまり、論説文の中で、日本語の受身文が中国語の能動文に訳された例は多く、“被”構文に訳される例は少なく、このことが、中国語母語話者の日本語の受身文の習得に影響を与える可能性は大きいだろう。

日本語の受身文の分類に関しては、前述したように直接受身、間接受身、さらに持ち主の受身を加えると 3 種類に分けられる。迷惑の有無に関しては、間接受身だけ迷惑の意味を表している。一方、中国語の受身は“被”“叫”“讓”“給”が用いられた受身と“意味上の受身”2 種類に分けられる。迷惑の意味を持つか否かに関しては、現代の中国語の受身は迷惑・不如意のみならず、中立的な意味もある。対照研究に関しては、日本語の動作主が明示されている受身は中国語でも受身で直訳されるが、それ以外の受身は能動文あるいは日本語原文にない動作主を加えて訳されているという傾向がある。次の節では、日本語と中国語の主観性に関する先行研究を概観する。

2.2 受身文の主観性

堀江・パルデシ（2009）は、類型論の観点から言語間の相違点と類似点を探っている。その中で、受身文の使用については、話者が出来事を自分或いは自分が共感する参加者の視点から主観的に捉えているかどうかを『窓ぎわのトットちゃん』（黒柳徹子著）、『こころ』（夏目漱石著）、映画『The Diary of Anne Frank 』の字幕セリフ 3 種類のパラレルコーパスとアンケート調査を使用し分析した。その結果、物理的な被害を受けた場合、日本語のみならず、英語も韓国語も中国語もマラーティー語も受身が使われているが、物理的な被害でない場合、日本語だけ受身文が使われていることがわかった。

また、どのような動詞が受身になりやすいかを明らかにするため、同研究では、19 例の日本語の受身文から構成されたアンケートで調査した。日本に滞在して、日本語

を上手に操る 11 か国の日本語学習者を対象にした。その結果、「踏む」「笑う」のような被害性が高い動詞は、日本語も中国語も韓国語も受身が使われているが、「言う」「反対する」のような被害性が低い動詞は、中国語も韓国語も受身が使われていない。つまり、日本語は被害の度合いを問わずに受身が使用される傾向がある。

2.3 学習者に関する先行研究

受身文の習得に関しては、母語の影響の有無をはじめ、視点、自然な会話で学習者のヴォイス習得順序を探る研究などの観点から研究されている（馮 1999,渡邉 1999, 田中 1999, 林 2007,張蘇・堀江 2010 など）が、研究自体はそれほど多くはない。2.3.1 では、母語の影響の有無に関する研究を概観し、2.3.2 では、視点に関する研究を概観し、2.3.3 学習者の習得順序に関する研究を概観する。

2.3.1 中国語母語話者の母語影響に関する研究

中国語母語話者に関する研究では、馮（1999）は、中国語母語話者が日本語の受身学習では母語に影響があるかどうかを明らかにするため、二つのアンケートを用いて、中国人と日本人を対象に実施した。その結果、学習時間が長ければ長いほど、助詞の学習エラーが減少していくと述べられている。

もう一つは、上記の対象者のうち中国語母語話者のみを対象としたもので、中国語に直訳できない日本語の構文文法が中国語母語話者にとっては習得しにくいか否かを見るためのアンケートを実施した。その結果、短期学習者群のみならず、日本語専攻群も長期学習者群も中国語の構文文法で言える項目が正しいと判断した傾向があると述べている。馮（1999）の研究結果によると、中国語にない受身の助詞は母語からの影響が少ないため、学習時間が経つにつれて習得されるが、構文文法は母語からの影響があるため、学習時間が経っても習得されにくいと説明している。

2.3.2 視点に関する先行研究

学習者がどこに視点を置き、物事を述べているかに関する研究は渡邉（1999）と林（2007） が挙げられる。渡邉（1999）は漫画の 4 コマで、日本語・中国語・韓国語・ドイツ語母語話者にそれぞれ母国語で漫画を語ってもらい、注視点[1]と視座[2]という二

[1] 渡邊が注視点を「だれの動作をみているか」と定義した（渡邊 1999，P15）。
[2] 渡邊が視座を「どこを（～寄りかどうか）それをみているか」と定義した（渡邊 1999，P15）。

つの見方で各母語話者の談話展開を見た。その結果、日本語母語話者が終始主人公に視点を据えて物事を述べているのに対して、中国語母語話者は同一人物に視点を据えない。注視点に関しては、日本語話者も中国語母語話者も動作によって注視点が変わると述べている。

林（2007）は受身の視点の習得状況について、台湾人日本語学習者を対象に実験を行なった。林は 12 コマの漫画を用い、書き言葉でストーリーを説明するという指示を与え、1 時間以内書いてもらった。その書き下ろされた文章を「視点＝ 視座＋注視点」[3]で分析した。この結果により、林（2007）は「学習時間が長くなるにつれて、受身表現の習得は進む（p.45）」と述べているが、研究題材を見ると、受身文が使用された場面はほとんど「叱られる」「殴られる」のような迷惑・不如意な場面であるため、このように言えるかどうかは疑問である。

2.3.3 受身の習得順序

張蘇・堀江（2010）は、中国語母語話者による日本語の受身文の習得順序を明らかにするために、中国の大学の日本語科に在籍する学生 67 名を対象に、それぞれ日本語能力試験 1 級・2 級文法試験によって、初級 32 人、中級 20 人、上級 15 人の 3 つのグループに分け、文法性判断テストとプロダクションテストを行った。文法性判断テストでは、問題文が正しいかどうかを判断させ、間違い文があったら訂正してもらった。プロダクションテストでは、動詞を提示し、絵を見せて文を作ってもらった。その結果、中国語の“被” 構文で表せる日本語の受身文の正答が多い。次に、持ち主の受身と間接受身文の正答が多いという順序であった。“被”構文で表せない日本語の受身は習得されにくいと述べられている。

一方、自然な会話を見た研究では、田中（1999）が OPI（Oral Proficiency Interview）のインタビューを文字化した KY コーパス（詳細は後述）を用いて、学習者のヴォイスの習得順序を調べた。田中はヴォイスを「可能」「受益」「直接受身（有生物主語」「直接受身（無生物主語）」「間接受身」「使役」「使役受身」「使役受益」「自

[3] 林（2007）は「視点＝視座＋注視点」を下記のように定義した。
視座とは、「見ている場所（どこから見ているか）」を示し、受け身表現または授受補助動詞が使われた場合（構文的手がかりがある）視座があると定義する。注視点とは、「見られる客体（どこを見ているか）」を示し、先に述べた両動詞（受身表現または授受補助動詞）以外の動詞が使われた場合（構文的手がかりがない）、注視点があると定義する。

発」「尊敬」と 10 種類に分類した。その分類したヴォイスで学習者の発話データを分析したところ、中国語、韓国語、英語母語話者とも可能形を先に習得し、次第に受益文が習得されてから直接受身文（有）が習得されるという順序が見られた。正用の直接受身文は、母語を問わず「言われる」が多用されている。正用の間接受身文（持ち主受身）は、超級英語母語話者にロールプレイで 1 例見られている。中国語母語話者は超級レベルで初めて正用の間接受身文数例が使用されると述べている。田中の研究から見ると、持ち主の受身は中級でも上級でも正用の例がない。あるとしても、対話の相手からのインプットを受けている場合だけだと述べている。ただし、自然な発話では格助詞がよく省略されており、学習者がどのようなことを言いたいかが分からず、正用か誤用か文脈と日本語母語話者の内省でしか判断できないと述べている。

2.4 まとめ

先行研究を概観したところ、馮（1999）が中国語の受身で表現できない日本語の受身文は学習時間が経っても、習得されにくいと述べている。張蘇・堀江（2010）も、“被” 構文に対応できない直接受身文が習得されるまで時間がかかると述べている。

一方、談話展開に関する研究について、渡邉（1999）は、日本語母語話者が終始同一人物の視点に据えて物事を述べているのに対し、中国語母語話者は同一人物に視点を据えないで物事を述べる傾向があると説明している。また、林（2007）は、学習時間が経つにつれて、中国語母語話者も日本語母語話者のように、主人公に視点を据えてストーリーを述べているとしている。これらの研究では、文字や絵などを提示されたことによって、受け身文を生成させるという研究が多いが、何も制限されていない自然な会話の中では、どのような受身文が使われているかに関する研究が少ない。田中（1999）は OPI で英語、韓国語、中国語母語話者のヴォイスの学習順序を明らかにしたが、学習者がどのような受身文を使っているかを見た研究は管見の限り見当たらない。そこで、本研究では、学習者がどのように受身文を使っているか、また学習者の受身文がどのように発達していくかを中国語母語話者を中心に明らかにしたい。

３.研究方法

本研究では、学習者の口頭能力を測るインタビューテストである ACTFL-OPI（以下、OPI）を文字化したコーパス（以下「KY コーパス」）を用いて、中国語母語話者が自然な会話の中でどのような受身文を使い始めるのか、そして、どのように発達していくのかを見る。その分析の仕方について、下記の＜1＞～＜3＞に示す。

＜1＞KY コーパスで、学習者がいつ受身文を使っているかを見るために、受身文とみられている文を正用か誤用かを問わずに全て取り出す。

＜2＞その取り出した受身文を、以下４つの観点から分類する。

①どんな動詞が用いられたか

②動作の受け手は何か

③迷惑の意味を表しているかどうか

④中国語の“被”構文でも言えるかどうか

②に関しては、先行研究により、日本語は話し手或いは話が共感する人物の視点から事態を捉えられているため、受身が使用されると言われている。中国語等の言語は客観的に動作の仕手の視点から事態を捉えられているため、能動文が使用されやすいとされている（堀江・パルデシ 2009,p196）。このことから、中国語母語話者が物事を述べる際に、自分以外の人には視点を据えずに物事を述べると予想する。そこで、動詞の受け手について、下記のように分類した。受け手が自分自身である場合「人（自）」とし、受け手が自分以外の人である場合「人（他）」とし、受け手がものである場合「もの」とする。

[主語：人（自 ）]　急に言われたらわからなくなった

[主語：人（他 ）]　ハイデッガーが批判されるようになって

[主語：もの　　]　骨董文化とか、〈ええ〉全部保存されておりますので

③に関しては、中国語の受身は叙述された事態が主語に対しては不如意或は望まない事態である際に使用されることが多いと言われている（王力 1959,p173）ことから、中国語母語話者が日本語の受身文を生成する際に、不如意・被害などの受身を多く使

用すると予想する。

④に関しては、“被”構文は中国語受身文のプロトタイプであると言われている（張蘇・堀江 2010,p64）ため、中国語母語話者が生成した受身が中国語で“被”構文で言えるかどうかを見る。筆者の内省及び日本の大学院で日本語教育学を専攻している中国語母語話者 1 名の内省により判断する。その判断方法について、まず、使用された受け身文を前後の文脈を見て、（6）のように、“被”構文に直訳できる文を“被”構文とし、（7）のように、直訳できない文を非“被”構文とする。以下の例の中国語訳の部分は筆者が訳したものであり、( ) 内の日本語訳はその中国語訳を日本語に直訳したものである。

（6）去年はわたし、政府派遣されて、〈ええ〉あの、国費、の、研究員、〈あー、はい〉として、あのー、まいりました

筆者訳：去年我被政府以國費研究員的身分派遣來日本。

（去年、私は政府に国費研究員として派遣されるのに日本に参りました。）

（7）日本のボーナスちょっと、違うと思うよ。完璧に給料の一部分になっておりますよ、手当みたいの部分あるよ、毎月支払われてますから

筆者訳：像是津貼的部份，公司每個月都會支付給我

（手当みたいなものが、会社が私に支払ってくれる）

（中級上中国語母語話者）

また、①～③に関しては、観察された結果が中国語母語話者だけの傾向なのか、母語を問わず同じ傾向なのかを見るために、同じく KY コーパスの英語母語話者と韓国語母語話者のデータと比較する。

＜3＞中国語母語話者の受身の使用が、中国語の“被”構文の使用の影響を受けているかどうかを見るために、日中対訳コーパスを用いて、中国語の“被”字句がどのように使われているかを見る。日中対訳コーパスの中から『ノルウェイの森』と『五体不満足』をそれぞれ正規表現の『わかさたなはまら]れ[るてたな]』で検索し、それぞれ最初の 100 例を取り出して分析する。2 冊の小説で合計 200 例となる。中国語で同

じく“被”字句で訳されたのが何か、訳されていないのが何かを観察し、その傾向が中国語母語話者の日本語の受身文の学習に影響しているか否かを見る。

上記の＜1＞から＜3＞の手順で中国語母語話者の受身の使用傾向を観察し、その発達プロセスを分析する。

4.分析と考察

本章では、前章で提示された研究方法により、KY コーパスで中国語母語話者がどのように受身文を使い始め、そしてどのように発達していくかを見る。そして、得られた結果を英語及び韓国語母語話者の結果と比較する。4.1 では、中国語、英語、韓国語母語話者の受身文の使用傾向を比較する。4.2 では、日中対訳コーパスでは、日本語の受身がどのように訳されているか、“被”構文でも用いられやすい文は何か、用いられにくい文は何かを見る。4.3 では今回 KY コーパスで観察された傾向について先行研究と比較しながら考察を行う。

4.1 中国語母語話者の受身文の使用傾向及び他言語母語話者との比較

本節では、中国語母語話者の受身文の使用傾向を見るために、まず、使用する際、どのような動詞を使って受身文を生成するか、受け手が何か、迷惑の意味があるかどうかを分類し使用傾向を見る。そして、その傾向が他母語話者と違いがあるかどうか、同 KY コーパス英語母語話者、韓国語母語話者のデータと比較する。

4.1.1 受身文の使用数

中国語母語話者が KY コーパスの中でどのくらい受身文を使って、さらに、英語と韓国語母語話者と比較するために、母語別の全使用数を下記の表 1 に示す。

表 1　母語別受身文の使用数（括弧内は一人当たりの平均数）

母語	初級			中級			上級		超級	合計
	下	中	上	下	中	上	上級	上級上		
中国語	0	0	0	0	1(0.3)	7(2.3)	10(3.3)	38(5.4)	27(5.4)	83
英語	0	0	0	0	4(1.0)	1(0.5)	8(2.7)	28(4.0)	33(4.0)	74
韓国語	0	0	0	0	16(2.7)	2(1.0)	10(1.7)	26(6.5)	23(6.5)	77

表 1 で示すように、どの母語話者も中級下まで受身文を使用していない。中国語母語話者だけではなく、英語母語話者も韓国語母語話者も中級中から受身文の使用が観察された。そのため、本研究では、これ以降の表では中級中から超級までの学習者のデータのみを示すこととする。

全使用数から見ると、中国語母語話者の受身文使用数は 83 文で、やや多いが大きな違いはないことがわかる。また、平均数で示したように、受身が観察され始めた中級中では中国語母語話者の一人当たりの受身文使用数は少なく、韓国語母語話者の使用数だけ突出している。ところが、上級になってからは、母語による使用数の差は見られない。受身の使用数に関しては、中国語母語話者が他の母語話者に比べ、使用傾向の差が見られないと言える。

4.1.2 動詞の使用傾向

中国語母語話者がその 83 文の受身文の中で、どのような動詞を使ったかを見たところ、「和語動詞」が 50 文あり、「漢語＋される」が 33 文あった。中級中から上級上まで、「和語動詞」の使用数が「漢語＋される」より多く見られたが、超級では「漢語＋される」が「和語動詞」よりやや多く使われていた。

また、学習者がどのような和語動詞を用い、受身を生成したかを見ると、上級では「言われる」が 7 回使用され、上級上では 13 文で、最も使われた。被害性の低い「言われる」は中国語では“被”構文では表さないことが普通であるが、なぜ母語では使わない受身文を多用する学習者がいるのだろうか。これは田中（1999,p136）が指摘しているように、フレーズとして使われている可能性が考えられる。

一方、「漢語＋される」が使われる受身文について、初めて観察されたのは中級上であり、上級と合わせて 5 文使われた。上級上になると、使用数が増えたが、まだ「和語動詞」より少なく、超級になって初めて使用数が逆転する。それぞれのレベルではどのような動詞が使われたかというと、中級では「逮捕される」「派遣される」、上級では「評判される」「募集される」、上級上では「発掘される」「質問される」など、バリエーションがあることがわかる。

全体的に見て、中国語母語話者の動詞使用傾向は「漢語＋される」が多用されていることが観察された。「和語動詞」では「はずされる」以外、初級教科書の受身練習

問題に出てくる動詞がよく使われる傾向が見られた。他の母語話者にも同じ傾向があるかを検証するために、英語と韓国語母語話者の使用状況と比較した。中国語母語話者と違って、英語と韓国語母語話者が受身文を使用する際、「和語動詞」が多用されており（68 例と 67 例）、「漢語＋される」の使用数が少ない（6 例と 10 例）。つまり、「漢語＋される」の使用は、中国語母語話者に特に見られる傾向であることがわかった。一方、「和語動詞」に関して、母語に拘わらず「言われる」が多用されていることもわかった。

4.1.3 主語の使用傾向

３.で述べたように、受け手がものか、自分自身（以下、人（自））か、自分以外の人（以下、人（他）かに分類した。これに基づいて、中国語母語話者の受身文の全使用例を見たところ、ものに視点を置く受身が最も多く、83 文のうち 38 文使用された。全使用数の 4 割強である。次に自分自身に視点を置く受身は 32 文で、全使用数の 4 割に近い。使用数が少ないのは自分以外の人に視点を置く受身で、83 文のうちわずか 13 文しか使用されておらず、1.5 割である。

レベル別に見ると、中級中で使われた受身文 1 例は、主語を人（自）に置く受身文であった。中級上では、主語を人（自）に置く受身文と主語を人（他）に置く受身文と主語をものに置く受身文が偏らずに使われていたが、使用数は少ない。上級・上級上では、主語を人（自）に置く受身文と主語をものに置く受身文が使われているが、人（他）に置く受身文は少ない。超級になると、主語を（他）に置く受身文の使用数が、主語を人（自）に置く受身文と同数使われるようになっている。つまり、上級上までは、自分以外の人（他）に視点を置いた受け身文が少ないということがわかる。

この傾向が英語と韓国語母語話者にも見られるかどうかを分析した。英語母語話者のデータでは、主語を人（自）と主語をものに置く受け身の使用数が多い（29 例と 30 例）が、主語を人（他）に置く受け身の使用数が少ない（15 例）。一方、韓国語母語話者のデータでは、主語を人（他）に置く受身文の使用数（31 例）は、主語を人（自）と主語をものに置く受身文の使用数（25 例と 21 例）と変わらず使われており、むしろやや多くなっている。したがって、中国語母語話者と英語母語話者には類似した傾向があると言える。これは話し手或いは話し手が共感する人に視点を据えて物事

を述べている傾向がある日本語（堀江・パルデシ 2009,p195）と比べると、視点の置き方が違うためだと考えられる。

4.1.4 迷惑の有無

中国語母語話者が使った受身文の中で、「迷惑を表す受身文」「中立的な受身文」「うれしい等肯定的な文脈での受身文」がそれぞれどのくらい使われていたかを調べた。総使用数から見ると、中立的な受身文が最も使われており、全使用数の約 6 割を占めている。次に、迷惑の意味を持つ受身文は 24 例で、全使用数の約 2 割である。肯定的な受身文の使用数は少なく、6 文だけで、全使用数の 1 割未満である。

レベル別に見ると、中国語母語話者が中級中で使用した一例の受身は迷惑の意味を持つ受身文である。そして、中級上では、中立的な受身文も観察され、上級になると、肯定的な受身文も観察されている。

中国語母語話者は中立的な受身文を多用していることがわかったところ、この傾向が英語と韓国語母語話者にも見られるかを分析した。その結果、英語母語話者のデータでは、肯定的な受身文の使用数が全使用数に占める割合は 13% で、迷惑的な受身は 5%、中立的な受身が全使用数に占める割合は 80%である。韓国語母語話者のデータでは、肯定的な受身文の使用数は全使用数の 5%、肯定的な受身が 32%、中立的な受身が 62％である。英語母語話者も韓国語母語話者も中国語母語話者の使用傾向が似ていると考えられる。

4.1.5 中国語の“被”構文との対応

本節では、中国語母語話者の受身文の産出が母語に影響されているかどうかを見るために、中国語母語話者が産出した受身文 83 文を筆者の内省及び日本の大学院で日本語教育学専攻の中国語母語話者（以下「研究協力者」）1 名の内省により、中国語の“被”構文で表せるかどうかを見る。

中国語母語話者が使った 83 例の受身文について、中国語では“被”構文で表せる場合は「“被” 構文」とし、表せない場合は「非“被”構文」とする。筆者の内省と研究協力者の内省と違いが生じた場合は「揺れがある文」とした。その結果、全使用数 83 文の中で、中国語でも“被”構文でも表すと考えられる受身文が 41 文あり、非“被”構文

で表すと考えられる受身文が 35 文ある。一方、筆者と研究協力者の意見のずれが生じた受身文が 7 文ある。

「言われる」を使った受身は中国語では“被”構文で表さないと堀江・パルデシ（2009）が述べているが、本研究での筆者ともう一名の中国語母語話者による内省では、「言われる」が使用された 41 例の中で、“被”構文でも表すと考えられる例は 6 例あった。その 6 文の中で、動作主が明示されている文は 4 文で、動作主が不特定多数である“被”構文が 2 文ある。その一例を（8）に示す。また、非“被”構文の一例として（7）に示しており、（9）は揺れのある文の一例。

（8）T：誰に言われたんですか。

S：や、会社の同僚から言われてもう、まあ行かないと、悪いかなあと思うけど、〈あー〉やっぱりー行きますよ

筆者訳：被　公司同事　這麼一說，不去　好像　不行

（上級上中国語母語話者）

（9）何か文化財とかなんとか、〈えーえー〉埋められてるかどうかまず確かめて

筆者訳：(在建工廠前，)首先先確認有沒有什麼文化財之類的東西被埋藏著等

研究協力者訳：　有沒有埋著什麼文化財產

（上級上中国語母語話者）

筆者は「文化財」が誰によって「埋められている」という状態を表す際、“被”構文が用いられると考えたのに対し、単なる物事の現状を表す際に意味上の受身文も使えるではないかという意見であった。したがって、動作主が不特定多数の場合は、中国語母語話者が母語で考えても“被”で表せてもいい、“被”で表さなくてもいいといった揺れがあると考えられる。

今回の調査により、“被”構文が用いられる文が多いが、“被”構文が用いられない日本語の受身文の使用数も多く見られた。中級中までの中国語母語話者は“被”構文に直訳できる日本語の受身文を多く使っているが、上級以上では、“被”構文が用いられない受身文も多く使っている。このレベルの中国語母語話者が教科書以外、ニュースや

ドラマなど生教材が多く触れていると考え、母語からの影響が少しずつ薄くなっていくと考えられる。ここまでの分析から、中国語母語話者は、レベルの低い段階では、中国語の“被”で表せる受身、かつ迷惑・不如意の受身、かつ主語を自分自身に置く受身を使っていることがわかった。次節では、さらに、母語からの影響を見るために、日本語の受身が中国語に直訳できる文は何か、直訳できない文は何かを日中対訳コーパスから抽出した 200 文をサンプルとして見ていく。

4.2 日中対訳コーパス

本節では、日中対訳コーパスを用いて、日本語の受身文が中国語の“被”構文に直訳できる文は何か、直訳できない文は何かを探り、ここまで見てきた結果が中国語と日本語の受身の違いに影響を受けているかを確認する。4.2.1 では日本語の受身文に直訳できる“被”構文が何か、4.2.2 では、日本語の受身文に直訳できない中国語被動構文が何かを述べたい。日中対訳コーパスで検索された結果、受身文が 167 文、可能 19 文、自発 14 文、尊敬 2 文、合わせて 202 文ある。受身文 167 文のうち、中国語にどのように訳されたかを下記表 2 に示す。

表2 日本語原文がどのように訳されたか

能動文	”被”	意味上受身	讓	得	能	給	會	受	遭	合計
110	25	17	5	3	2	2	1	1	1	167

本調査では、日本語の受身文が中国語に最も訳されたのが能動文である。次に“被” 構文であるが、数は多くない。日本語の受身文のうち中国語で能動文で表されていたのは 110 文、全受身文の約 66%を占めており、“被”構文で表されたのは 25 文、約 15%であった。日本語の受身文は中国語でも受身に訳される文が少ないという結果は飯嶋（2007）と堀江・パルデシ（2009）の研究と一致する。

4.2.1 日本語の受身文が直訳できる“被”構文

本調査で日本語の受身文が中国語でも“被”構文で表されていた文は 25 文あったが、そのうち、迷惑的な“被”構文は 12 文、中立的な“被”構文 12 文、肯定的“被”構文は 1 文あった。迷惑的な“被”構文の一例を（10）に示し、中立的な“被”構文を（11）に示

す。（10）は話者が手術を受けることに不安を抱き、手術着を着せられることによって、うれしくない出来事である。（11）では目で見た現実をそのまま述べていると考えられる。

（10）布を巻いただけのような手術着なるものを着せられる

（10）’ 我被換上手術服

（『五体不満足』）

（11）根もとに立って上を見上げると空はその緑の葉にすっぽりと覆い隠されてしまう。

（11）’站在樹下抬頭仰望，只見天空被綠葉遮掩得密密實實。

（『ノルウェイの森』）

今回の分析では、迷惑的な“被”構文の数と中立的な“被”構文の数が同じであることが見られた。先行研究と反して、“被”構文は迷惑的な気持ちだけではなく、中立的な“被” 構文も多く使われていると見られる。本研究の KY コーパスの分析結果では、中国語母語話者が中立的な受身を多く使っており、また、中国語の“被”構文で表せる受身の中でも中立的なものを使用していたという結果が得られているが、この対訳コーパスの結果から考えると、中国語母語話者の受身の使用には迷惑性はあまり影響しないのかもしれない。

4.2.2“被”構文に直訳できない受身文

日本語の受身文で中国語の“被”字句に訳されていない文は 110 文ある。その一部を下記の（12）～（14）に示す。

（12）それやられると目が覚めちょうんだ。

（12）’你那麼一做我就不用睡了

（13）T シャツの背中にはアップル・レコードのリンゴのマークが大きく印刷されていた。

（13）’海軍衫的背後還印著一個大大的蘋果標記

（14）雨にうたれた猿のように疲れているの。

（14）’就像淋過一場大雨的猴子似的

（『ノルウェイの森』）

日本語の原文を見ると、ほとんど話者の立場から物事を見て述べている。つまり、日本語では視点が統一されている。一方、中国語の訳文を見ると、（12）は動作の受け手が自分自身であるのに、動作の仕手に視点を置いて述べている。（13）はあるものの状態や事態の結果を表しており、“被”構文の代わりに能動文で表している。(14)は、雨に降られることが自然に降りかかってきたから、誰かがの外力で支配したりするわけではないから、“被”構文になりにくいと考えられる。

日中対訳コーパスでは、日本語の受身文は中国語では能動文で訳される文が圧倒的に多いと観察された。しかし、迷惑の意味を持たない“被”構文も観察されたため、中国語母語話者は迷惑の意味を持たない受身文も生成しやすい可能性がある。一方、視点の置き方が違い文は中国語母語話者にとっては難しいと考えられるため、学習者が受身文を使って視点を統一させる文が使えないと予想できる。

4.3 考察

本章では、今回 KY コーパスで観察された傾向について先行研究と比較しながら考察を行う。

4.3.1 動詞について

動詞の使用傾向からいうと、英語母語話者と韓国語母語話者に比べ、中国語母語話者の「漢語＋される」の使用数が多いが、「和語動詞」の使用数が英語母語話者と韓国語母語話者と比べると、やや少ないという結果が見られた。ただし、数多く使用された「和語動詞」の中で、中国語母語話者のみならず、英語母語話者も韓国語母語話者も「言われる」の使用数が多いと言う結果も見られた。

KY コーパスから得られた結果を日中対訳コーパスと比べて調べたところ、「言われる」は日中対訳コーパスではほとんど“被”構文には翻訳されず、一般的に(15)(16)のように能動文に翻訳されている。

（15）でもそう言うとね、魚なんかおろさなくていいって言われるの

筆者訳：可你這麼一說怎麼著，馬上又說什麼魚那玩意兒不切也無所謂

（16）「だって石田先生に会えって言われてきたから

筆者訳：可是人家告訴我找石田先生啊

（『ノルウェイの森』）

つまり、中国語の“說”（話す）の言語使用は、一般的に“被”構文には使われていない。堀江・パルデシ（2009）が被害性の「言われる」は中国語では受身文ではなく、能動文で表していると（p.200）指摘しているが、今回のデータから見ると、上級までの中国語母語話者には「言われる」の使用数が見られなかったが、上級から「言われる」を多用する学習者が見られた。その原因はなんであろうか。許（2004）の調査によると、NHK テレビドラマ『ひまわり』では受け身文が使用されたセリフ 758 語の動詞の中で、「言われる」の使用頻度が一番高く、758 語のうち 166 回使用された。したがって、母語では使わない受身表現でも、インプットが多ければ使うようになると考えられる。さらに、フレーズとして過剰使用になる学習者もいるのは興味深い。

また、「漢語＋される」が多く使われていることがわかった。その原因については、漢語動詞は中国語母語話者にとっては馴染み深いうえに、動詞の活用形のない中国語母語話者にとっては、「語幹＋される」が使われやすいことが考えられる。例えば、（17）（18）のように、類似な話題が取り上げられているときに、中国語母語話者は和語動詞よりも「漢語＋される」を選択した。それに対して、非漢字圏の英語母語話者が「漢語＋される」よりも「和語動詞」を選択した。したがって、考える時間が短い自然な会話の中で、中国語母語話者は、和語動詞を活用させるよりも、使いやすい漢語に「される」をつけるだけという形での産出がしやすいのではないだろうか。

（17）法律的にですか、〈ええ〉まあ、たとえば、アメリカのように、そういう売春、売春はまあ日本でも禁じられてますよね

（超級英語母語話者）

（18）麻雀しても昔は一応、禁止されておりますけど

（上級上中国語母語話者）

4.3.2 主語について

KY コーパスで観察された中国語母語話者の使用傾向では、自然な会話の中で、主語を自分以外の人に置く受身の使用数が少なかった。

堀江・パルデシ（2009）は日本語では動作に影響されるか否かにかかわらず、話し手もしくは話し手に共感する人物の視点から物事を述べる傾向が強いが、他の言語では動作に影響されるかどうかにもかかわらず、客観的に動作主の視点から物事を述べる傾向があると述べている（pp195-196）。今回観察された傾向でも、中国語母語話者は自分以外の人を受け手にする受身は超級になるまでは使用数が非常に少なかった。前述のように、日中対訳コーパスで観察された（15）（16）は、中国語母語話者が動作の仕手が「何をした」かに注目したからと考えられる。したがって、中国語母語話者が日本語の受身を生成する時にも、母語に影響され、被動作主が自分自身以外の人には視点を置かないと考えられる。

4.3.3 迷惑の有無

今回の KY コーパスでの観察結果、全体的な使用数から見ると、中国語母語話者が迷惑な受身文の使用がそれほど多くなかった。中国語母語話者の日本語の受身の生成順序から見ると、中級中では唯一使用された受身は迷惑の受身であり、中級上では、7 文の中で 4 文使用された。しかし、上級以上では、中立的な受身の使用数が多い。先行研究では、中国語の受身はその出来事が主語にとっては不如意・望ましくないことを述べている際に使われているとされていた（王力 1959,p173）が、今回の KY コーパスでの観察結果は迷惑の受身より中立的な受身がよく使われた。その使用例を（19）～（21）に示す。

（19）中国では、一番険しい山です。あの、映画にされたこともあります

（超級中国語母語話者）

（20）あの源氏物語は、〈うん〉あの女性の手で、〈ええ〉あの作成された

（超級中国語母語話者）

（19）（20）では、動作主ではなく、被動作主の状態を描写しているとして使われたと考えられる。何故こういった受身が多く使われたかについて、まず、中国語では動作主を下げて、動作を被ったものの状態を描く意味上の受身文（大河内 1983, 劉ほか 1991 など）があるため、単なるものの状態を叙述するときに使われたと考えられる。また、渡邉（1995）は、学習者の受身は全て母語の影響で生成されるわけではなく、日本語学習の過程で個別に獲得した知識を生かし生成されると述べている。つまり、学習時間が長くなるにつれて、新聞やニュースなど日常的に使われている様々な日本語を触れる機会が多くなり、得られた知識に影響されつつ、それを生かして受身文が生成されていくと考えられる。

4.3.4 中国語の“被”構文との対応

今回の KY コーパスの観察では、中級学習者に唯一観察された受身文は持ち主の受身であった。張蘇・堀江（2010）では、「持ち主の受身文」は中国語でも直訳できるため、習得されやすいと説明している（ p.64）。つまり、中国語に直訳できる日本語の受身は学習者にとっては早く使えるようになると考えられる。

（21）あー、泥棒は、うちのことはないですけど、S の自転車盗まれたのことあったんですね　（筆者訳）S 的自行車有被偷過

（中級中中国語母語話者）

一方、中国語母語話者が使用した受身文 83　例のうち、“被”構文でも表す受身は 41 例、“被”構文では表せない受身は 35 例もある。母語と違う表現は学習者にとっては習得されにくい（馮 1999,p69）と言われている。また、日本語のプロトタイプは直接受身であり、中国語のプロトタイプは“被”構文であるため、「“被”構文に対応できる直接受身」が中国語母語話者にとっては習得されやすいと述べている（張蘇・堀江 2010,p64）。しかし、今回のデータでは、“被”構文では表せない受身が多く使われていることが観察された。

レベル別に見ると、中級上レベルの学習者では初めて“被”構文に表せない受身 1 文を使われた。上級になってから、使用数が徐々に増えた。上級上レベルの学習者は、ものがどのような動作に被ったのを言うときに、受身で使うようになった。それは前節で述べていたように、テレビニュースやドラマ、新聞など生教材を触れていることが増えるにつれて、文型を変えずに、語彙だけ入れ替えて生成した可能性があると考えられる。例えば（21）のように、話者が新聞の記事について話している。また、日本に滞在している中国語母語話者の多くは日本人ネイティブの会話やテレビ番組あるいは本など耳にしたり読んだりしていることによって、生の日本語との触れる機会が多いではないかと推測できる。

また、今回の観察では、中級上以外の学習者が主語をものに置く受身文或いは動作主が不特定多数か団体である場合には、中国語の“被”構文で表せない表現であっても、日本語の受身文を使っているという傾向が見られた。したがって、インプットが多ければ多いほど、気づきが結びやすくなり、習得につながると考えられる。

5.終わりに

本研究では、KY コーパスを分析し、中国語母語話者の自然な会話の中での受身の使用傾向を見た。

まず、中国語母語話者の受身の使用は中級中から観察された。この傾向は英語母語話者と韓国語母語話者も同様であった。受身の使用数は中級中では英語母語話者と韓国語母語話者より少ないものの、中級上から超級になると、使用数に母語による大きな違いはなかった。次に、動詞の使用傾向では、中国語母語話者が「和語動詞」より「漢語＋される」が多く使われている傾向が観察された。使用された「和語動詞」のうち、「言われる」が最も使われている。この傾向は中国語母語話者だけでなく、英語母語話者・韓国語母語話者にも観察された。次に、どのような主語が使われたかについて、中国語母語話者は自分以外の人に主語を置く受身文の使用数が少なかった。韓国語母語話者の使用数と比べると、半分しか及ばない。さらに、迷惑の有無については、中立的な受け身が多く使われ、予想と異なり迷惑の受身がそれほど多くないこ

とが観察された。このような傾向は英語母語話者にも韓国語母語話者にも同じように見られた。

一方、レベル別に見ると、自分に関わらない他人に主語を置く受身はレベルが上がっても使用数があまり増えない。迷惑の有無については、中級中では、初めて使われた受身は迷惑の受身であるが、レベルが上がるにつれて、中立的な受身文が多く使われるようになった。また、“被”構文で表せない受身文は、中級までは使用が少ないが、上級以上では使われていた。

したがって、今回の考察を通して、まず、中国語母語話者が自然な会話の中で日本語の受身文の産出は中国語では“被”構文で表せるかどうかにも関わらず、レベルが上がるにつれて、母語からの影響が薄くなることがわかった。また、中立的な受身文もレベルが上がるにつれて、よく使用される。一方、視点の置き方はレベルが上がっても、自分に関わらない他人に視点を置く受身文の使用数が著しく増えないということがわかった。つまり、母語で表せない構文でも、迷惑性のない受け身でもレベルが上がるにつれて、習得されていくが、視点の置き方は中国語母語話者にとってはレベルが上がっても習得されにくいことが明らかになった。

その要因として、動詞や迷惑性の有無などはテレビや書籍、ネイティブのインプットなどによって、気づきが起こりやすいと示唆される。一方、視点に関しては、会話の時にはあまり指摘されず、テレビを見ても明示的に示されていないため、気づきが起こりにくく、レベルが上がっても、相変わらず母語に影響されたままで、習得されるまで時間がかかると考えられる。

本研究では、中国語を母語とする日本語学習者の自然に近い発話の中での受身文の使用を見てきた。しかし、今回の考察では、中国語母語話者が母語で会話するときに、どのくらい“被”構文が使われているか、また日本語母語話者が母語で会話をするときに、どのくらい受身文が使われているかの分析は行っていない。また、今回の考察では、中国語母語話者がどのような受身を使っているのを見るために、正用か誤用かを問わずに全て取り扱っていたが、細かいところ、たとえばどんな格助詞が使われたか、使われた格助詞が正しいか否か、直接受身か間接受身かなどは詳しく見ていない。今後、この研究を踏まえて、中国語母語話者が自然な会話の中でどのくらい“被”構文を

使っているか、その使用傾向が日本語学習に何か影響を与えているかを見る。そして、その学習プロセスに応じて、適切な教授法を考えることを課題にしたい。

参考文献

飯嶋美知子（2007）「論説文の訳文から見た受動文の日中対照研究-中国語母語話者への教育の一環として-」『早稲田大学日本語教育研究』pp.17-30

石村広（2005）「類型特徴から見た中国語の受動文」『成城文芸』192 pp.142-128

大河内康憲（1983）「日・中語の被動表現」『日本語学』４月号 pp.31-38

大塚容子（1989）「視点による日英比較」『日本語教育』67 号 pp.173-180

王力(1947)『中國現代語 下冊』商務印書館

郭姿余（2008）「日文被動表現之相關研究-透過中日對照研究之分析-」碩士論文 南台科技大學

久野暲（1978）『談話の文法』大修館書店

サウェットアイヤラム・テーウィット（2009）「受け身文の談話機能の習得-タイ人日本語学習者を対象に-」『第二言語としての日本語の習得研究』第 12 号 pp.107-126

坂本勝信（2005）「中国語を母語とする日本語学習者の「視点」の問題を探る」『常葉学院大学研究紀要（外国語学部）』第 21 号 pp.1-10

下地早智子（2001）「日本語と中国語の受身表現について--機能主義的分析--」『東京都立大学人文学報 311』pp.75-91

杉村博文(1997)「遭遇と達成-中国語被動文の感情的色彩-」大河内康憲編『日本語と中国語の対照研究論文集』くろしお出版 pp.277-294

曾金金（2005）「由平衡語料庫和中介語語料庫看漢語被字句表述的文化意蘊」『Journal of Chinese Language and Computing 15(2)』pp.89-101

戴蓮娜(Demetska Olena)（2009）「英、俄、漢語被動句對比研究」碩士論文 國立中山大學

田中真理（1999）「視点・ヴォイスに関する習得研究-学習環境と contextual variability を中心に-」『平成 8 年度～平成 9 年度科学研究費補助金基盤研究（C）（2）研究成果報告書』

田中真理（2010）「第二言語としての日本語の受身文の習得研究－今後の研究の可能性－」『第二言語としての日本語の習得研究』13 号 pp.114-146

張蘇・堀江薫（2010）「中国語母語話者による日本語受動構文の習得：プロトタイプ理論を援用して」『言語科学学会第 12 回年次国際大会予稿集』pp.61-64

張文禎（2002）「初探漢語與韓語被動句」 碩士論文　國立臺灣師範大學華語文教學研究所

陳紋慧（2004）「現代漢語被字句教學語法初探」碩士論文 國立臺灣師範大學華語文教學研究所

寺村秀夫 (1982)『日本語のシンタクスと意味　　第I巻』くろしお出版

中野琴代（2000）「漢字形態素「被」に見られる受け身概念について-日本語と中国語の比較・対照に於いて」『下関市立大学論集』44 巻 2 号 pp81-88

仁田義雄（1991）『日本語のヴォイスと他動性』 くろしお出版

仁田義雄（2009）『日本語の文法カテゴリをめぐって』　ひつじ書房

日本語記述文法研究会（2009）『現代日本語文法 2 第 3 部格と構文第 4 部ヴォイス』くろしお出版

堀江薫,プラシャント・パルデシ（2009）「主観性を帯びる受動構文の使用に基づく言語の認知類型」山梨正明編『言語のタイポロジー-認知類型論のアプローチ-』研究社　pp.185-211

馮富栄（1999）『日本語学習における母語の影響-中国人を対象として-』
風間書房

森田良行（1995）『日本語の視点～ことばを創る日本人の発想～』創拓社

森山卓郎 (2000)『ここからはじまる日本語文法』　　ひつじ書房

劉月華・潘文娯・故韡（1991）『現代中国語文法総覧（下）』片山博美・守屋宏則・平井和之訳　くろしお出版

渡邉亜子（1995）「中国語母語話者の日本語受身文の使用実態とその背景 ： 母語との対照からの仮説設定(水谷信子先生退官記念号)」『言語文化と日本語教育』9 pp.216-228

渡邉亜子（1996）『中・上級日本語学習者の談話展開』くろしお出版